

# おてら

先祖への供養は  
私への供養

## 会要法彼岸秋

九月二十日〜二十六日

二十三日(土・祝)

彼岸中日法要

午前十一時より

法話後 おとき

おときも椅子席になっております

二十四日(日)

永代経法要

午後七時より

お彼岸中にお墓参りをしましょう

ご本尊様にもお参りいたしましょう

常例十六日講  
毎月十六日午後一時より  
お経練習・法話会  
写経会  
毎月第二・四火曜日  
午後一時より

愚か者 住職 蒲原 霊英

お釈迦様のお弟子に、周利槃特という方がおられました。周利槃特は、自分の名前も覚えられないくらいに記憶力が無く、当然、説法を聞いても聞いても理解できないし、覚えられません。「私は物覚えが悪く馬鹿なので、お釈迦様のお話が理解できません。兄からもう帰れと言われてしまいました」と泣いていると、お釈迦様は、「お前も弟子の一人。ここに居なさい。己を愚かだと知っている者は愚かではない。己は賢いと思いつける者こそ愚かなのだ」と言われ、白い布(箒)の説あり)を渡し、「塵を払い、垢を除かん」と唱えながら掃除をするよう言い渡しました。「毎日ひとつの事を真面目に繰り返すのはなかなかできないこと。頭で分かっていたつもりになって、本当のところは何も分かっていない者こそ愚かである。周利槃特の欲のない行いはすばらしい」と、お釈迦様は馬鹿にする皆の前でお褒めになりました。周利槃特は何十年も掃除を続け、ついに、塵や垢とは、自分の心の中にある「三毒」  
|| 「むさぼり(貪欲)・いかり(瞋恚)・おろかさ(愚痴)」に他ならないことに気付きます。そして、少しずつお釈迦様の教えを理解していき、ついに、「阿羅漢」という悟りの境地に達する高い位のお弟子になりました。

親鸞聖人は、自らを「愚禿親鸞」と名乗り、「愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」と言われています。自らの内面には様々な問題を抱えていながら、それを無視したり、外見でごまかして、自分ではない自分を演じて生きていくとする私たち。「愚禿」という名乗りは、自らに真正面に向き合い、自らを偽らずに生きていくこととする聖人自身の決意を明らかにするものです。聖人でさえも大変難しいことであるので、あえて決意表明されたのです。しかし、「あるがまま」の自分と向き合い、受け容れることができれば、「こんな愚かな私でも、何かひとつくらいはやれることがあるだろう。それを一生懸命やってみよう」と前向きに考えることができ、その結果として豊かな人生を歩ませていただけるのではないのでしょうか。

因みに、周利槃特が自分の名前を忘れないように首から名札(名荷)を掛けていたので、彼の死後、お墓の所に生えてきた見かけない草を「茗荷」と名付けたと言われ、「茗荷を食べると物忘れをする」との俗説が生まれました。しかし、物忘れもしませんし、周利槃特は本当は素晴らしい方だったので、これから茗荷を食べる時、この話を思い出して味わって下さい。合掌

